

昨年の夏、観光でキューバを訪れた。首都ハバナを走るオールドラシックカー：映画「ハバナ」で見た60年前の街並みとさほど変わらないのに驚いた。

昭和33年、革命前夜の年の瀬、ハバナを舞台にロバート・レッドフォード演じるカードギャンブラーと革命運動闘士の女性との恋と運命を描いた映画だった。煌びやかなカジノホテルこそ消えたが、サルサと葉巻、そしてお酒は、今もこの国の人々を陽気に支えている。

昭和34年1月1日、カストロ率いる革命軍がハバナ占領を遂げ、米国の傀儡政権を武力で打倒した後、社会主義国家を樹立し、半世紀以上に渡り米国と敵対してきた。

その革命の英雄「フィデル・カストロ」も、昨年、90歳でその人生の幕を閉じた。冷戦時代、東側諸国に見られた陰鬱な独裁とは異なる、庶民を惹きつける類稀なカリスマであったことは間違いない。

事実、ハバナの街には、指導者賛美のプロパガンダや偶像（モニュメント）はなく、よもやタックスヘイブンに隠し口座もない。ある意味、個人崇拜や私利私欲に左右されない独裁的指導者は、歴史上彼だけだ。

また、彼は広島を訪れ、慰霊の意を表した数少ない国家元首のひとりであり、オバマ大統領の広島訪問に際し、「原爆投下への謝罪がない」と批判した。

身近な話としては、テレビドラマ「おしん」

『防弾チョッキ着けてますか？』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

を愛し、「日本が戦争に負けても大国になったのは『オチン』のように頑張つて働いたからだ」と敬意を表したと言われ、今でも『オチン』は、ハバナの有名人である。

若いころから弁護士として貧困者を助け、革命の指導者として理想の国家像を追い続けた彼だが、米国を敵にまわし、長年の経済封鎖や、経済的失策により、キューバの近代化を遅らせたこともまた事実だ。

しかし、中南米における米CIAの傍若無人にも日和らず、100回以上にも及ぶ暗殺計画を退けてきた、彼の強い信念には学ぶべき点が多い。

昭和54年、ニューヨークの国連総会へ参加するため渡米した時、「防弾チョッキ着けてますか？」と聞かれた彼は、シャツのボタンをはずしてこう言った。

「NO!」「でも、モラルというチョッキを着ている」

「これは力強いんだ!」

その国連の常任理事国、米露中英仏の五大国は今もなお、核というチョッキを纏い小国を威嚇する。既に国際社会は、資本主義か共産主義か、という時代を卒業し、核保有国の覇権主義が横行しているが、弱肉強食の歴史は普遍だ。

強い国の指導者には、常に「モラル」というチョッキを身に着けてほしい。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中